

FOA-NEWS

通算第30号

2011/2/28

競技規則委員長就任にあたって

田中淳夫

昨年(2010年)の3月13日に行われた競技規則委員会にて、2010、2011年の競技規則委員長に任命されました。競技規則委員会は関東審判部から七久保さんと阿部(仁)さんが委員として参加(小林さんも関東学生連盟の立場で参加)しており(ルールブックの最後のページに全員の名前が載っています)現在のように審判以外の協会関係者やチームの関係者にも参加してもらう形となったのは、1992年からです。それ以降2005年までは喜入さんが委員長、2006年から2009年までは関西審判部の東元さんが委員長という体制で、お二人は92年よりずっと前から日本のルールおよびルールブックの策定に関わって来られていました。そのお二人に代わって関西審判部の濱田副委員長とともに、日本のフットボールのルールを決定し、ルールブックを発行して行くことになり、責任の大きさに身が引き締まる思いです。

2010年はNCAAがルールブックを2年に1回の発行に変更したために、日本でも正式なルールブックの発行を見送りましたが、今年はNCAAにあわせ、日本のルールブックの発行の年となります。3月12日開催の日本の競技規則委員会、その後の予定報発行やルールブック発行に向けて活動を始めており、1月30日、31日には、アメリカのフェニックスで行われたCFOのコーディネーター会議に濱田さんとともに参加させていただきました。これは、このたびデビッド・パリー氏(オフィシエティング・マニュアルの最初に写真が出ています)に代わってCFOのナショナル・コーディネーターとなり、NCAAのルールの責任者(Secretary-Rules Editor)でもあるロジャー・レディング氏(昨年5月に大阪に来られました)を議長として、スーパーボウルの笛を吹いた

方が何人もいるアメリカのディビジョンの各地区の代表(約20人)の集まりで、ビデオを見ながらルールやメカに関して論議する彼らの生の声を聞いたことは大変な幸せです。

このような会議に参加できる道筋を作って来られ、また、電子メールやパソコンがない時代からルールブックを発行し、そしてそのプロセスを築いてこられた先輩諸氏に感謝し、日本のフットボールの発展に関われるようにがんばりたいと思っています。

ベースとなるのはNCAAのルールで、国際試合が増えて来ている中で極力独自のルールとしないことが基本ですが、何といても一番大切なのは現場の審判の方々の意見です。これまで同様に、関東審判部の皆様のご意見をいただきたく、またいろいろご協力をよろしくお願いします。さまざまな困難があると思いますが、競技規則委員の皆様、関東審判部の皆様、諸先輩方、そして天国にいる水田さんや佐藤浩さん等がサポートしてくれると信じています。



Parry氏引退にあたり、奥様のPatさんと

クラッシュボウル決勝クルー

常守 康昌

私が2010シーズンのクラッシュ決勝のレフリーのオフアーをお受けしたのが、まだ猛暑が残る9月の中旬でした。まず最初に考えたのは「ずいぶん無茶なアサインをするなあ」というものでした。ここ数年1部のレフリーを受け持つ機会が増えたとは言え、上位チーム同志やプレーオフがかかったシビアなゲームをレフリーとしてこなした経験が殆ど有りません。それがいきなりボウルゲームを任されるとは夢にも考えておりませんでした。

10月の第一週より6試合のトライアルを行なったのですが、とにかく罰則の施行を間違えたり、メジャーメントのメカをミスる等、本当に反省の連続でした。しかし10月24日に川崎球場で富士通 vs オービックの第1ステージの天王山のゲームをフルメンバーにて担当し、シビアなゲームを乗り切った事でクルーの連携が強まった事は間違いありません。

11月23日には品川の日本協会でクルーミーティング

を実施致しました。我々クルーの他、理事・インストラクターにもお集まり頂き、トライアルの映像を参考に、個々に修正すべき点やクルーとして足りない部分を確認出来た事は、我々にとって貴重な経験となりました。トライアルのレビューを作成頂いた東さんや映像を編集された七久保さん、休日に夜遅くまでお付き合い頂いた皆様には心から感謝致しております。

私にとって今回のトライアル～クラッシュ決勝に至る期間は、クルーの仲間だけでなく審判部の皆様からサポート頂いている事を実感した2ヶ月間でした。よく「ボウルゲームのクルーは審判の代表だ」などと言われますが、むしろクルーを通して、チームとしての審判部の力量を表現していると言えると思います。12月5日の法政大 vs 早稲田大の決勝を無事にオフィシェイティング出来たのも、審判部全員の協力が有ったのもののなのです。



クラッシュボウル決勝クルー

U 幸村益利、HL 山本鉄雄 LJ 藪内直樹
BJ 田村俊久、SJ 牧田信英、FJ 白井健二
R 常守康昌

Japan X Bowl レフリー体験記

川田丈浩

トライアルを重ねて

Japan X Bowl (JXB) クルーでゲームを担当する「トライアル」を計4試合、組んでいただきました。クルーはベテラン揃いです。10月23日、最初のトライアル。トライアルということあまり意識せず、自然体で臨みました。さすがベテランだけあって、全員個人レベルではメカニック、ルールの理解、判定などは全く問題がないことがわかりました。コーチや選手とのコミュニケーションもバッチリです。ただ、サイドライン際の判定、ファンブルリカバーの判定、クロック・オペレーションといった場面でクルー同士がうまくコミュニケーションできないことがありました。

そこで、以降のトライアルでは、フィールドでのクルーのコミュニケーションを課題として掲げました。また例え些細なことであっても、新たな課題(ボール交換を急ぎすぎない、反則を伝える時は誤解を招かないよう落ち着いて正確に伝える、など)が見つかる、その都度、話し合いました。2試合目のトライアル以降のプリゲームミーティングでは、ポジションやキーといった基本的なメカニックの確認は最小限にして、前の試合の反省点やチーム情報の確認、準備運動などに時間を割きました。こうやってトライアルを重ねるうちに、徐々にコミュニケーションが良くなってくるのが実感できました。

心の準備

レフリーとしての心の準備を改めて考えました。普段も同じですが、ボウルゲームでは特にゲーム・マネジメントが重要になってきます。おそらく大半のプレーは何事もなく進むでしょう。しかしその中で必ず試合の流れを左右する何かが起きるはず。微妙な判定、興奮した選手同士のトラブル、コーチや選手からのアピール、試合終盤のシビアな状況でのクロック・オペレーション、

などなど。そんな時にいかに毅然とした対応ができるかがポイントです。そのため必要なことは「自信」と「覚悟」だと考えました。自信を持つためには、勉強するしかないと思い、JXBの2週間前から、ルールブックの全ての条文を読み直しました。しかし、読めば読むほど新たな疑問が生じてきて、なかなか自信が持てません。

そんな状態のままJXBの1週間前、最後のトライアルを行いました。ゲーム後、全員で行った「反省会」で、酒が入っている気分になりながらクルーと話をするうちに、不安が膨らんでいるのは自分だけではないことがわかり、なぜか安心しました。いくら準備をしても、完璧なオフィシェイティングはできないでしょう。しかし、トライアルを重ねてきて、クルーとしてのレベルは確実に上がり、お互いの信頼感も高まってきています。私自身については、ルールブックを何度も読み返してきたことで、少なくともこれまでと同じ失敗はしないだろう、と思えるようになっていました。これはちょっとした「自信」なのかもしれません。そして、「覚悟」と呼べるのかどうかはわかりませんが、何があってもクルーで解決する、そのために出来るだけのことはやってきたはず、という気持ちになれました。JXBまであと数日です。

JXB 当日

12月20日。集合時間の約1時間半前に東京ドームに入りました。まだほとんど誰もいないフィールドを一周ゆっくり歩きながら、レフリーとしてもう一つ大切なことを頭の中でおさらいしました。それは、選手やコーチ、観客から落ち着いて見えること、安心感を与えることです。これまでにいろいろな方からいただいたアドバイスを思い出しました。レフリーマイクを使うときは歩きながら話さない、話すことを頭の中で整理してからマイクのスイッチを入れ、話し始めるまでにもう一呼吸置く、

話すときは同じ場所を見て視線を動かさない、早口にならない、シグナルはゆっくりと大きく、選手やコーチと話すときは穏やかな表情で、そして毅然と。

プリゲームミーティングでは、トライアルでは必要最小限にしていた基本メカニクスの確認を、丁寧にやりました。クルーの皆さんに（もちろん自分自身も）最後のおさらいをしていただきたかったからです。そして、危険な反則は早めにきっちりとコールしよう、十分に準備してきたので気負わず普段通りのことをやろう、何よりもゲームを楽しもう、ということを皆さんと確認し、フィールドへ向かいました。

フィールドでは、いきなり試練が待っていました。TV生中継があるので、キックオフは19時5分と決められています。ところが、予定よりも約3分早く国歌斉唱が始まってしまったのです。何かおかしいと思いつつも、事前に準備したセレモニーの手順をアジャストする余裕など当然ありません。セレモニーが終わってフィールド中央でクルーが集まりました。19時2分。まだ3分もあります！審判がポジションについてしまうと間が持たないので、選手にはハドルしておくよう声をかけて、我々も中央に集まったまま時間まで待ちました。「あと何分？」「1分20秒くらい」「ええっ、まだそんなにあるの？」そんな会話をしながら辛い時間を過ごしました。しかし、この時間のおかげで、私自身はかえって落ち着くことができました。何が幸いするかわかりませんね。

気が遠くなるほど長い3分が過ぎ、ようやくキックオフを迎えました。ゲームはご覧になったとおりです。最後まで勝負の行方がわからない好ゲームとなりました。私もクルーの皆さんも、最初は緊張していましたが、1Qが終わる頃にはすっかりゲームに集中できるようになっていました。細かいミスや対処に迷う場面もありましたが、お互いに声を掛け合って対応し、勝敗に影響するようなトラブルに発展することはありませんでした。後半にはボウルゲームという特別な感情はなくなり、普段と変わらない感覚になっていました。あっという間に2時間40分のゲームが終了しました。

ゲームを終えて

クルーからは異口同音に「このゲームはタダで終わるわけがない、と思っていたが、スムーズに進んで拍子抜

けた」という感想を聞きました。確かにラッキーでした。両チームとも、コーチも選手も極めて紳士的で、余計なことをせずゲームに集中してくれました。本当に有り難いことです。しかし、ただのラッキーではなく、我々審判がきっちりジャッジし、必要な時にはコーチとコミュニケーションを取り、興奮しそうな選手がいれば早めに声をかける、そんな当たり前のことを当たり前のように実行できたことが、ラッキーを生んだのだと思います。そして何よりも嬉しかったのは、クルーの皆さんに「フィールドに立っていることがとても楽しかった」とおっしゃっていただいたことです。

今年、また新たなシーズンを迎え、様々なシーンに遭遇すると思います。楽しいことよりも辛いことの方が多いかもかもしれません。しかし、十分に準備をして各自の役割を果たせば、きちんとゲーム・マネジメントができ、心からゲームを楽しめる、ということを忘れず、JXBで感じたような幸せを一人でも多くの部員に感じていただくためのお手伝いをしたいと思います。

最後になりましたが、このような素晴らしいゲームになったのは決してレフリーの力ではありません。寒い日も台風の日も貴重なビデオを撮影して下さい。TAVの皆様、当日フィールドの7人を全力で支えて下さった計時担当、スタンバイ、サポートクルーの皆様、そしてシーズンを通してこんなレフリーを支えて下さった6名のクルーの皆様に心より感謝いたします。



R 川田丈浩、U 増田直樹、HL 廣瀬進、LJ 根岸作力、BJ 伊藤義樹、SJ 斉藤聡、FJ 宮島敦史

ライスボウル・レフリーとして

「これが最後のボウルゲーム・レフリーだな。」アサイメントの打診をいただいた時に、そのことを強く感じました。何が出来るだろうか。部員の皆さんに、クルーの皆さんに、アシスタント・クルーの皆さんに。まずそのことを考えました。部からは、ライスボウルまでに4試合のトライアルを予定していただきましたので、そこで何を伝えるかを考えました。また、12月21日13時か

（仲の悪いクルーだと言われて）

東 俊

らの東京ドームホテルでのライスボウル記者発表会にも参加し、チームガイダンスに出席、両チームからの質問に答えました。実際の試合の前に両チームのヘッドコーチとお会いして言葉を交わす機会を得たことは、特に立命館大学の米倉ヘッドコーチと言葉を交わせたのは、当日のプリゲーム・ミーティングでの友好的な機会を創り出す助けとなりました。

トライアルの最初の試合は、10月30日(土)11時キックオフ@アミノバイタルフィールドでの「明治学院大学 vs. 学習院大学」の試合でした。東郷さんの都合がつかずLJには、市川さんに入っていました。当日は、冷たい雨が降り、強い風の吹く、台風のような気候の中での試合になりました。それでも、両チームは一生懸命にゲームを進めてくれましたし、それに負けずにクルーも頑張りました。寒さで手が震えてしまい、オフィシャル・カードの記入もままならず、寒さのため唇を紫色にしながら審判を続けてくれたクルーに感謝しました。この試合の事前の確認メールでは、両校のリーグでの状況を伝えるとともに、クルーには基本通りのオフィシエイティングを求めました。以下は、試合前のメールの内容です。

『両チームに全力を出させ、悔いのない試合をさせたいと思います。そして我々審判員も審判することを楽しくめるように、大相撲ではありませんが、「心技体」を充実させて試合に臨みましょう。この試合では、「基本を通じて自分の課題を見出すこと」をテーマにしたいと思います。

私の考える「基本」は、「BOX-IN」「LINES」「CREW」に加えて、ルールでは、今年の強調課題である「スポーツマンシップ」と「無防備なプレーヤーの保護」「ヘルメットによるコンタクト」への対応に留意してください。メカニックに関しては、両隣のメカニックを頭に入れて、お互いにカバーできるように動きましょう。良いメカニックで的確なジャッジをしてください。ジャッジのベースは、コモンセンスとフィロソフィーです。そして、クルーとの、プレーヤーとの、コーチとの、チーム・スタッフとの、観客との、学連関係者とのコミュニケーションを大事にしていきましょう。丁寧に解りやすく、そして慎重に。です。我々はアマチュアですが、心はプロで審判を行いたいと思います。

計時担当のお二人は、オフィシエイティング・マニュアルの「第8篇 ゲーム・クロックとプレー・クロック」と「96ページ~99ページ タイマーへの指導」を確認しておいてください。もちろんルールブックの「第3篇 節、競技時間、交代」「第4篇 プレー中のボール、デッドボール、アウト・オブ・バウンズ」を確認しておいてください。特に、3-2-4、3-3-2は重要です。審判を大いに楽しみたいと思います。 “ HAVE FUN!!! ”

この試合は、映像に収めていただきましたが、残念ながら劣悪な気象条件の下での試合でしたので、参考にはできませんでした。そんな中でも、きちっとオフィシエイティングしている審判クルーはうれしかったです。

トライアルの第2試合は、11月14日(日)16時30分キックオフ@アミノバイタルフィールドでの「成蹊大学 vs. 学習院大学」の試合でした。2試合続けて学習院大学を見ることになりました。この時点でブロック1位と6位の試合でしたが、永年のライバルですので好試合が想定できた試合でしたので、そのことを事前にク

ルーには伝えました。学習院大学のホームカミング・デーでしたので、試合前にいくつかのセレモニー、イベントがあり、コイントスは、調布市の長友市長が担当されました。と試合前に色々なことがあったのでレフリーはすっかり心が紛れてしまい、コイントスでアンパイアにコインを拾ってもらって手渡された後、一人スタスタとキックオフのポジションに着いてしまいました。クルーからの呼び戻しの声も聞こえず、後に残されたクルーは、「今日は、レフリー抜きでも頑張ろう!」と声を掛け合って、それぞれのポジションに着いたようです。失敗、失敗。

ブリゲーム・ミーティングでは、前回の試合で確認した各人の課題を発表してもらい、ポストゲーム・ミーティングでは、その成果を発表してもらいました。クルーが個々のメンバーの課題を共有してその解決を手伝うというクルー・ワークが実現しました。各人の課題は、試合を通じて克服されていました。ケガ人が多く発生したこともあり、2時間31分の試合でしたが、クルーとしてまとめ、コミュニケーションは非常に良くなってきたという感触を得ました。

この試合の課題は、事前メールで次のように伝えました。『この試合では、「基本を通じて発見した自分の課題を修正する事」をテーマにしたいと思います。常日頃行っていること(行動や考え方)を修正する事は、すごく難しい事だと思います。でも、それにチャレンジしていただきたいと思います。克服できれば、次の高みに立っているご自分を発見できると思います。審判がもっと面白くなると思います。ご自分の課題を修正するためには、自己認識がベースですが、クルーという仲間がそれを助けてくれます。コミュニケーションを密にして、仲間と一緒に、楽しみながら課題を克服していきましょう。』基本の部分は、前回と同じ内容をお伝えしました。初めて、クルーがそろった試合でしたが、この試合は、映像を撮りませんでした。反則は13でした。

トライアルの第3試合は、11月21日(日)14時30分キックオフ@横浜スタジアムでの「オービックシーガルズ vs. IBMビッグブルー」の試合でした。Xリーグ第2ステージ全勝対決です。勝ったチームがファイナル・ステージに進出です。結果は、ワイルドカードに「IBMビッグブルー」が選出されましたが...

事前のメールで、この試合で求めたものは、『ゆったりとしたオフィシエイティング、美しくカッコいいシグナル』をテーマにしたいと思います。基本に忠実に、細かい事にも気を配ったオフィシエイティングを実現したいと思います。』でした。基本の部分は毎回同じ内容を求めました。加えて、『Xリーグのスピードを楽しみたいと思います。オフィシエイティングは、“ HAVE FUN!!! ” でいきたいですね。』としました。



プリゲーム・ミーティングでは、前2試合で感じたことを伝えました。「デッドボール後のオフィシエイティングの継続、アウト・オブ・バウンズのカバー、タイムアウト・シグナルのリレー、ゴールライン・メカ、リバース・ゴールライン・メカ、アイコンタクトといった基本を大事にすること」「コミュニケーションを密にしてお互いをカバーしあうこと」「楽しんで審判する事」等を確認しました。3時間に及ぶ長い試合でしたが、期待通り、ライスボウルに向けて絶好のハイスピードの試合を体験できましたし、全員が緊張を切らさずに、よく走った試合でした。この試合でも課題の確認と達成度の確認を行いました。

Q Bがスクリーメージラインを越えてパスを投げたとのコールにショート・ウイング二人が確実に見ていてフラッグを取り消すことが出来たのは、トライアルを積み重ねた、一つの成果だと思います。また、新たな課題として、後半最初のプレーでキックオフ・リターンTDとなったプレーで、全員でBOX-INを保ち、カバーしながらの動きが難しいということが確認され、次の試合で確実に解決するための継続課題にしました。

B Jに入ってくださった沼崎さん、ありがとうございました。反則は、11でした。

12月5日(日)13時キックオフ@味の素スタジアムで「クラッシュ・ボウル」が開催されましたが、クルーに呼びかけて、クラッシュ・ボウル・クルーの応援に会場に行きました。『ボウルゲームの雰囲気を感じて、プレーヤーに全力を出させるご自分の審判のイメージを固める一助にしていきたいと思います。』とも伝えました。同日に、川崎球場では、馬島さんのレフリーでJXBセミアイナルが行われましたので、そちらへの参加でも当然OKとしましたし、馬島さんにエールを送りました。

トライアルの最終試合は、12月11日(土)13時45分キックオフ@アミノバイタルフィールドでの1部と2部の入替え戦「日本体育大学 vs. 東京農業大学」の試合でした。

試合前のメールでは、『この試合では、再度「基本に戻る」をテーマにしたいと思っています。基本に忠実に、細かい事にも気を配ったオフィシエイティングを実現したいと思います。』と伝えました。プリゲーム・ミーティングでは、「カバーの重要性」を強調しました。

- ・隣のポジションの審判員が、クルーが、してほしいと思っていることを意識する事。
- ・サイドライン際を駆けあがってのタッチダウン・プレーでは、ディープ・ウイングとショート・ウイングで

アイコンタクトで確認をしてからTDシグナルを出すこと。

- ・ショート・ウイングは、第1ダウンの判定の際に、後ろのチェーンを振り返らないこと。
- ・ボールキャリアからボールを受け取る事に留意する事。差し出しているのに無視しない。ボールキャリアに審判員を探させないこと。
- ・B Jは、少なくともハッシュからハッシュの間を自動車のワイパーのように動いて、ディープ・ウイングの判定をカバーする事。
- ・QTでの確認は、R、U、HLで行うこと。他のクルーは、BOX-INを崩さずに次のサクシーディング・スポットをカバーする事。L Jは、次のサクシーディング・スポットを、先回りして押えること。

一つひとつのプレーを確認しながら審判を行うという意味では、仕上げの試合として良い試合だったと思いますが、ここまでクルーが出来上がってしまうと、全てのプレーがはっきりと見える、そんな自信を持てた試合でもありましたし、我々の「伸びしろ」はまだまだ大きいと感じられた試合になりました。その意味で、審判の動きが、前半は少しちぐはぐな感じのある試合でしたので、コミュニケーションの重要性をハーフタイムで再確認し、締めました。もちろん、後半は改善されました。ポストゲーム・ミーティングでは、各自が冷静に自分を把握できている状況が確認でき、クルーとして仕上がりました。反則は11でした。

ここまできての心配は、ライスボウルまで3週間以上、23日間のブランクが空くことでした。体調の維持も並大抵のことではありませんので、クルーもそのことを不安に思っていました。強く、そこで、12月20日(月)19:00@東京ドームでの「JXB」を、計時担当、スタンバイも含めて、全員で観戦する事にしたことと、12月26日(日)13:00~拙宅にて、事前のクルー・ミーティングを持つことにしました。12月19日(日)の甲子園ボウルは、各自で観戦する事を課しました。

12月26日(日)のミーティングには、全員が出席してくれ、また、インストラクター委員会の田中淳夫理事も参加してくれて、狭い拙宅は熱い男たちの熱でいっぱいになりました。

13:00~20:00までノンストップで、自分たちの映像のうち主に「オービック vs. IBM」の試合から私がプレーをピック・アップして、プレー・バイ・プレーで確認を行いました。また、甲子園ボウル、JXBの映像、関西大学 vs. 立命館大学の映像を見て、イメージ作りを行いました。

田中理事からは、その後の、懇親会でもクルーのテーブルに来ていただき、一つひとつ、指摘をいただきました。本当に助かりました。感謝しています。これらのことが、ライスボウル当日まで、感覚を切らさずにいられることに役立ってくれたことと思っています。

ライスボウルの直前のメールでは、コーディネーター

の大塚理事にアシスタント・クルーへの連絡を行っていたが、微に入り細にわたった事前メールを送っていただきました。ですから、レフリーは、クルーへの連絡だけに集中する事が出来ました。ありがとうございました。

1月3日(月)のライスボウル当日は、クルーだけで11:30に集合してもらいました。クルーだけのミーティングを持って、お話をしたいと思ったのです。それは、「感謝」「敬意」「信頼」「自信」「勇気」について話をしたかったのです。

・「感謝」:この場に自分たちが立てるのは、家族、友人、仕事場の同僚、関東審判部の仲間、アサインしてくれたアサイメント委員会、理事会、これらの人たちが我々をこの場に送り出してくれた。感謝の気持ちを持ってフィールドに立ってほしい。それと、立命館大学をこの場に送り出してくれた全国の審判仲間、オービックシーガルズをこの場に送り出してくれた関東関西の審判仲間に感謝の気持ちをフィールドで伝えたい。

・「敬意」:全国の審判仲間に対するレスペクトの気持ちを忘れないでほしい。さらに、ライスボウルまで登って来てくれた立命館大学とオービックシーガルズの両チームへのレスペクトを持ってフィールドに立ってほしい。その過程で、敗者となったチームに対するレスペクトの気持ちも忘れないでほしい。

・「信頼」:この試合をするために、クルーとして育ててきたこと。トライアルを通じて、お互いに信頼できる仲間になったこと。そんなクルーを信頼してオフィシエイティングしよう。

・「自信」:我々は、仲間に信頼されるレベルの審判が出来るまでに育っている。自信を持って審判して欲しい。ただ、過信は禁物。160のプレー一つひとつを、真摯に、誠実に、気を抜くことなく審判して欲しい。

・「勇気」:その「自信」を持って、「勇気」のあるジャッジをしてほしい。3時間楽しみましょう。そうすれば、ライスボウルを審判したことに「プライド」を持つことが出来る。我々の責任は、ライスボウルの審判を行うことに加えて、ライスボウルにアサインをされてから今日までのこと、そしてこの試合で得たことを、関東審判部の仲間に伝えて行くことです。ライスボウルの審判としてプライドを持てる試合をやりましょう。ただし、よそいきにならず、いつも通りに。クルーと計時担当、スタンバイにこの話をしました。

その後、12:00から、作ってきた6ページの資料と時間表に合わせて、23名全員でプリゲームのデューティを進めて行きました。

試合前に、セレモニーでのコインをレフリーが拾うのか、アンパイアが拾うのかを確認して、アンパイアが拾って三森さんにお渡しする事にしましたが、実際の際は、コイン・トスのシグナルをして、ふと、フィールド

を見るとコインがちゃんとありましたので、レフリーが拾って三森さんにお渡ししました。打合せとは違って、いろいろなことが起こるのがフィールド上ですね。

しかし、試合の内容は、ご覧の通り素晴らしいものでした。両チームの全力をぶつけ合ったクリーンな試合に感謝しています。反則は7つ:フォルス・スタート4、ディレイ・オブ・ゲーム1、背後のブロック1、ホールディング1でした。アサイメントを作成し、このクルーを作ってください、準備の場を用意して下さった関東審判部理事会に感謝します。また、トライアルに参加して下さった、部員の皆さんにもお世話になりました。何か変だなと思ったことと思いますが、全力で審判していただきました。

この感謝の気持ちをお伝えしたく、クルー、計時担当、スタンバイ、コーディネーターにカレッジボウルの観戦と担当クルーの応援を呼びかけました。ほとんどの方が参加されることが分かりましたので、試合終了後に打ち上げの会を行いました。川崎の「モナリザン」で、壁にテーブルクロスを掛けていただき、ライスボウルの映像を映しながら、ワイガヤで、あのプレーはどうだった、このプレーはこうだったと、楽しい2時間を過ごして、文字通りクルーを解散としました。

ボウルゲームの審判員は、ある見方からすれば、関東審判部の審判技量を日本全国に発表する場でもあります。その意味でも、今年のライスボウル・クルーも、懸命に努力をし、成長を見せてくれました。そして、まだまだ「伸びしろ」が大きいということも示してくれ、関東審判部の技量の高さを全国に示せたと確信しています。

私の最後のボウルゲーム・レフリーで、皆さんとクルーであったことを誇りに思います。阿部さん、佐竹さん、東郷さん、鈴木さん、中内さん、馬島さん、相馬さん、潮さん、岡本さん、そして大塚さん、ありがとうございました。

なお、(仲の悪いクルーだと言われて)というサブタイトルは、クルー同士が歯に衣を着せずにずけずけとものが言い合えるほどにクルーとして仕上がって来ている段階で、コミュニケーションがよくなってきている状態の時に、どなたかが、まるで喧嘩のようなその状態を見て「仲の悪いクルーだからな」とおっしゃった言葉です。



「シニアクラブのご紹介」

シニアクラブ 事務局 長谷川 忠典

1. 設立の経緯

日本の社会全体と同様、我々関東審判部も高齢化が進行しつつあります。平成17年2月の納会時に安藤信和氏から私に、60歳以上の人も増えてきたので、何か会をもったらどうかとのご提案がありました。グラウンドを離れる審判員も増えたので納会以外にも会合をもつことは必要であり、事務局として早速取り掛かりました。

2. 設立の運び

第1回の会は平成17年5月11日、新宿で開催しました。第1回につき規約を定めるとともに会長に安藤信和氏、副会長に平澤俊夫氏を全会一致で選任し、会の名称を関東審判部シニアクラブ(以下本会といいます)と決定しました。規約で本会の目的の一つに「関東審判部に対する後援(3条2号)」を入れてありますが、実際は飲むばかりで目的に添った活動とはいささか乖離しております。

3. 以後の活動内容

設立以後は年2回、春秋に例会を開催しております。梶ヶ谷哲朗氏、神子光氏など、私が現役時にグラウンドで活躍された(古い!!)先輩たちにも加わっていただき、交流を深めております。活動の中でも大きなイベントは「安藤会長の卒寿をお祝いする会」の開催でした。平成22年4月3日に、立教大学のご厚意で構内のイベント会場「藤だな」を利用させていただき、伊藤義樹実行委員長(実は準会員)のご尽力で会員のほか審判部幹部8名を含め25名の方に参加いただき、盛大に開催できました。

4 今後の動向

本会会員は平成22年10月現在で27名にのぼり、今後ますます増加の見込みです。現役審判員に良きアドバイスを提供(無理か?)しながら、交流を深め、おじさんのフットボール生活をエンジョイして行きたいと思っております。

Central Football Officials (CFO) Clinic 参加報告

阿部 仁

日程：2010年7月9日(金)～7月11日(日)

参加者：川田、阿部(仁)

開催場所：米国イリノイ州シカゴ

CFO クリニックは金曜日の夕方から2泊3日で、日曜日の正午に終わる。参加者のほとんどはシカゴ周辺から車で来るため、金曜日は仕事を早めに切り上げ、日曜日の午後に家族のもとに戻るという想定でスケジュールが組んであるのだろう。日本からの参加者は当然ながら我々二人だけだ。さすがに当日到着はきついで、前日にシカゴ入りして、レモニア氏(Bill)のご好意によりお宅で一泊させてもらう。Billの奥様のBarbさんは現役の小学校の先生である(ちなみにBillも学校の校長先生を数年前に退職したそうである)。地下にあるBillの書斎にて、DVDによるケーススタディの作成方法を見せていただいた(これは、後に夏の研修においてパールボウルレビューを作るのに大いに参考となった)。



CFO 審判クリニックは毎年7月に、米国中西部のシカゴで開催されている。毎年130名前後の参加者があり、これを組織するのは地元の審判協会メンバーなので、講師陣にもBig Ten出身の審判や元審判が多い。Big TenレフリーのBillやジョン・オニール氏、そして元Billのクルーで今はNFLのアンパイアであるトニー・ミハリック氏など、豪華な顔ぶれが1時間ほどのセッションをリードする。日本でBillのプレゼンを経験しているため、アメリカ人の審判はみんな彼のようにビデオを使って参加者と対話型でやるのかとのステレオタイプを持っていたが、実際見てみるとBillほど上手な人はあまりい

ないことがわかった。やはり先生という職業柄、Bill は話が上手なのだろうか。

内容は「パイロン際でのイン・アウトの見極め」や「ポジション別のメカニック」など、日本でも比較的好まれるセッションがあれば、「意義あるブリゲームの仕方」や「クルーの評価基準について」審判スーパーバイザー（評価委員）が説明するものなど、日本ではあまりお目にかかれないものもあった。Honig's という審判グッズ専門店が出席しており、来シーズンから導入される2インチストライプのシャツを熱心に販売していた。運よく、2010年のOfficiating Manual（英語）が販売されていたので、参考に一冊入手。

一日のセッションが終わると、近くのピザパブでビールとピザとスベアリブとローストビーフをたらふく食べる。といってもアメリカ人の半分くらいの量しか食べていないのだが。話すうちにわかったのだが、参加者の大半は大学レベルの審判になってまだ数年しか経験がない。今は二部や三部リーグの審判で、いずれ上を目指す志の高い人たちなのであろう。アメリカは連盟（カンファレンス）ごとに固定の審判クルーがいくつかあり、引退などによる欠員は連盟の審判スーパーバイザーがクルーチーフ（レフリー）と相談しながら埋めていく。よって、スーパーバイザーや審判仲間に、フィールド上やクリニックなどで自分をアピールすることはその後のステップアップに大いにつながるようだ。

日曜日にクリニックが終わった後、Bill がシカゴのオヘア空港近くにあるBig Tenの連盟事務所の見学を特別に手配してくれた。ちょうど中西部の二部リーグに属する審判スーパーバイザーに対する研修会が開催されており、ルール改正についてのシーズン前確認を行っているところだった。日本から来たゲストだとBill が紹介してくれると、会議用の資料が入ったパッケージを惜しげもなく渡してくれた。こういうところはアメリカ人らしい。中を見るとなんと昨日 Honig's で買った 2010 年 Officiating Manual が入っている。次の日、帰りの飛行

機の中で読み始めたら、すぐに深い眠りが襲ってきた。



7/9 金曜日	
18:45-19:00	開会の挨拶
19:00-19:45	パイロン際の見極め
19:45-20:30	ゲスト 基調講演
20:30-21:15	レフリー メカニック
21:15-21:30	授賞式
	懇親会
7/10 土曜日	
8:30-9:15	Deep Wing (BJ, SJ, FJ)のメカ
9:15-10:00	無防備な選手への接触
10:20-11:00	アンパイアのメカ
11:00-12:00	NCAA からの強調点
13:35-14:20	Short Wing (HL, LJ)のメカ
14:20-19:00	トピック別の分科会
	懇親会（昨日と同じ場所、同じメニュー）
7/11 日曜日	
8:30-9:15	負傷への対処について
9:15-10:00	意義あるブリゲームの進め方
10:00-11:00	DVDケーススタディの作り方
11:00-11:45	スペシャルチームプレー
11:45-12:00	閉会の挨拶

東北学生連盟審判部の紹介

審判部長 清野 芳則

関東審判部の皆さまには、弊審判部の設立以来、育成とご指導にご尽力いただき、改めて感謝申し上げます。

歴史

東北学生連盟は、1975年に学生が立ち上げました。試合の無いチームが審判を務める状況からのスタートでした。ルールもほとんど分からず各チームの学生を集めて関東審判部から桜井氏を講師に招きルールクリニック

をしていただきました。腰から下のクラックバック・ブロックが反則になったと聞いて驚いた記憶があります。

80年代に入って少数のOBが審判に参加するようになりました。大磯クリニックに招待していただき、覚えて来た内容を持ち帰って学生審判に指導していました。この頃、東北に勤務されていた喜多氏に何回かクリニックを開催していただいております。

90年代に入り、北海道との対戦や地区対抗戦が始まり審判レベルの低さを痛感する事になりました。数年間の試行期間を経て、全ての試合で社会人が審判を務める体制が出来たのが93年頃です。その後、防大OBの佐々木氏（故人）や東北に転勤されていた大野部長、森氏に参加・指導をいただいて今に至っています。現在も南竹氏が在籍中です。

組織、部員数と活動実績

東北学生連盟の傘下組織として活動しています。2010年の登録は40名ですが、実働は25名でした。レフリー担当者は9名です。オープン戦が11試合、リーグ戦が入替戦も含めて18試合、ボウルゲームが7月に北海道との交流戦、12月に南北オールスター戦が行われました。

クリニック

5月に新人クリニック、座学と実技を1日で行います。6月に関東のオープン戦に2名派遣。8月のクリニックは、経験者向けと全体向けを2日間で行います。毎年講師派遣をお願いしており、去年は田中氏と田口氏に來仙いただきました。

「関東審判部の皆様、ジンギスカンはお好きですか??」

関東審判部の皆様、日頃より大変お世話になっております。北海道審判部長の幸村です。

近年、甲子園ボウルが日本選手権化されるなど益々各地区の審判部の連携が重要になっており北海道審判部も関東審判部と連携を図ることにより色々な情報を得て審判部活動を行っているところです。

皆さんも機会がありましたら是非北海道へ来ていただき、美味しいジンギスカン、ラーメン、海鮮を食べ一緒にクルーを組みましょう。

歴史

北海道審判部は昭和57年頃にそれまで各大学のOB達で行っていた審判組織を本格的に審判部として活動をはじめております。中村、大澤、藤木に続いて私が第4代の審判部長ということになります。

組織、部員数と活動実績

では、現在の北海道の活動について簡単に報告します。

今年度の登録審判員は51名でここ数年は比較的安定しています。地元就職が少なく北海道外に出て就職する大学生が多いので新人登録の審判員は毎年15名くらいが入替わるという現状です。

大学が1部6校、2部8校、社会人が4チームあり

課題と今後の予定

新規の参加者の定着が悪い、世代交代が上手くいっていない等、難しい課題が山積しています。来年度から北海道とのパインボウルが復活する予定です。日本選手権の予選にふさわしい審判が出来る様に体制作りを進めて行きたいと思っています。

1980年頃のリーグ戦



北海道審判部長 幸村益利

これらの試合を担当しています。

試合実績は春オープン戦が25試合、秋リーグ戦が

47試合で合計72試合を行いました。

4月 プレーヤー向けクリニック（ルール改正及びプレーヤーセーフティ）

5月 新人クリニック（新人審判員を対象にオープン戦で実施研修）

6月 関東審判交流（毎年関東の試合に審判を派遣）

スズランボウル（関東審判部から審判派遣をしていただきクリニックとスプリットクルーを実施。）

7月 審判講習会（秋期リーグ戦に向けての研修）

8月 審判講習会（ルール改正、秋季リーグに向けての研修）

8月 学生・社会人開幕

11月 全日本選手権

12月 納会

以上のスケジュールで毎年活動しております。

課題と今後の予定

個人的には3年前から関東審判部に所属して、皆さんと一緒に試合会場でお会いしており、大変お世話になっております。北海道審判部は若い審判員も多いで

すが、情熱を持って活動してくれておりますので審判部員一丸となって頑張っていきます。

今後も北の大地で同じ志を持った仲間が活動しておりますのでご指導を宜しくお願いいたします。

2010 West Coast Football Official Allianceに参加して



田口 眞行

8月6日～9日の4日間、サンフランシスコで開催された PAC-10 クリニックに参加してきました。今年は PAC-10 だけの単独開催ではなく、標準化に向け DIV-I から DIV-III までの広いレベルの審判を対象とした、アメリカ西部の大学フットボール審判のクリニックとして表題にある西部の大学クリニックとして開催されました。参加者は アメリカ西部の大学フットボール審判 [Pac-10, WAC, WCFOA, NIFOA] フィールドオフィシャル、リプレイオフィシャル、メンター、スタッフ各カンファレンスの役員、Pac-10 OB の NFL オフィシャル、他地区オフィシャル テキサス、IFAF Referee; Frank Kristensen そして日本からは七久保さんと田口でした。

ソーガンさんをはじめ多くのメンバーのみなさんから暖かく迎え入れていただき、オープニングで紹介していただいた後はいろいろな場面で声をかけていただきました。特に JAPAN BOWL や MIRAGE BOWL などて来日していた方もいてあの時は、親切にしてもらったと、懐かしそうに話をしてくれました。クリニックのコーディネーターは昨年同様、デブ・クタイア (Dave Cutaia) さんです。クタイアさんのリーダーシップはすばらしく、ほとんどのセッションで中心となってクリニックを運営していました。まさに、ルール・メカニック・運営の神様の様な存在です、しかしこのクリニックを裏でサポートしているコーディネーターのソーガンさんの人望もすばらしいもので、私たちの参加も許されていることに感謝せずにはいられませんでした。

クリニックの内容

- 規則変更の理解
- 規則の理解度の確認・標準化
 - テスト
 - ビデオクリニック
- メカニックの確認
- ポジション間の調整
 - 補助メカニックの決定
- 運営関係
- 心構え

クリニックの基本的な構成は我々のクリニックとほぼ同様の内容となっていますが、始めのセッションから高いレベルの内容となっていました。

最後にプライベートでも北海道へお越しの際は幸村までご連絡下さい。

規則変更のところでは日本と同じように、変更内容全体を解説した後で、次の2点に議論が及びました。

・ F K時のウェッジ・フォーメーション

→誰が見るのか？

・ ライブボール中のスポーツマンらしからぬ行為

→厳しくライブボール・ファウルとして施行しない。

規則の理解度の確認は筆記テストが実施され、ボールが置かれるヤードライン、ダウン数&残りのヤード数、ゲーム・クロックの計時 (スナップ / RFP) プレー・クロックの計時 (40/25) を解答するというもので、U ポジションではグループで解答を話し合いましたが、白熱した議論が展開され有意義でした。筆記テストとともにビデオテストというものが初めて導入され、ビデオを見て何の反則があったか、つぎのダウンは？などを解答するもので新鮮な経験でした。

ポジション間の調整では、はじめポジションごとに話し合いをしたあと、U は R と合同になって調整をし、その後、全体でポジションリーダーが調整の結果を発表して全体のメカニックを決定していました。

運営では大学関係者との関係について注意喚起がなされ、不用意な発言やうかつに話に乗らない、お金には気をつけるなど細かな注意もなされていた。また、試合後数日で試合のビデオをインターネットでアクセスして見られるシステムの導入の説明がされていました。

インスタント・リブレイ (以下、IR) を採用しているため、クリニックは、フィールド・オフィシャルと IR オフィシャルが対象となり、それぞれ個別のセッションと合同のセッションが組み込まれていました。ソーガンさんは IR コーディネーターとしてクリニックをリードしていました。トップレベルのオフィシエーティングと最新情報を学べたこと以上にいろいろな人との交流ができたことは非常に有意義で、今後の審判活動に生かしていきたいと思っています。

